

かざ

ぐるま

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2026 夏号

113

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集
和歌公園観海閣の復元的
新築工事



特集 名勝和歌の浦 和歌公園観海閣の復元的新築工事

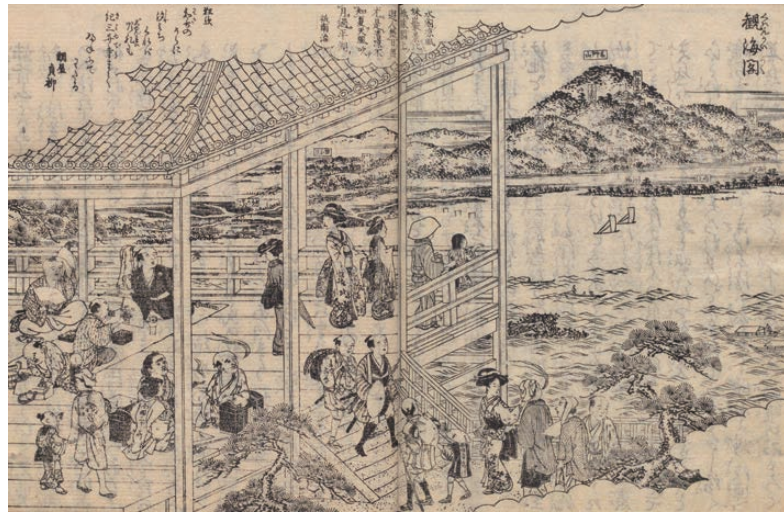
1. 観海閣とは

若の浦に 潮満ち来れば 瀉をなみ

葦辺をさして 鶴鳴き渡る

万葉集に収められている山部赤人の和歌に詠われるように、和歌の浦は古代から広く知られた景勝地であり、国指定名勝和歌の浦として保護されています。その中でも片男波の砂洲に護られた内海が潮の干満で刻一刻と干潟へと変化していく様は、熊野へと続く山並みの遠景と併せ、まさに絶景といった風情です。

桃山時代には浅野幸長が、和歌の浦の景観を取り込む形で天満神社を整備し、江戸時代になって徳川家の統治となると、初代藩主頼宣はその父家康を祀る壮麗な東照宮を天満神社の東に位置する権現山に建立しました。そして引き続き東照宮の南に位置する和歌浦湾の小島妹背山に三断橋を架け、母養珠院の追善供養のために多宝塔を建立するなどの整備を行いました。その一連の造営で、半ば海に張り出す形で水閣・観海閣が建てられ、広く庶民に開放されました。その様子は江戸時代



紀伊国名所図会に描かれた初代観海閣

後期の紀伊国名所図会にも描かれ、大勢の西国巡礼者たちがくつろぎ、景色を愛でる姿を伺うことが出来ます。

初代観海閣は、江戸時代前期の慶安年間(1650)に紀州徳川家によって建てられ、およそ200年後の江戸時代末の慶応2年(1866)に

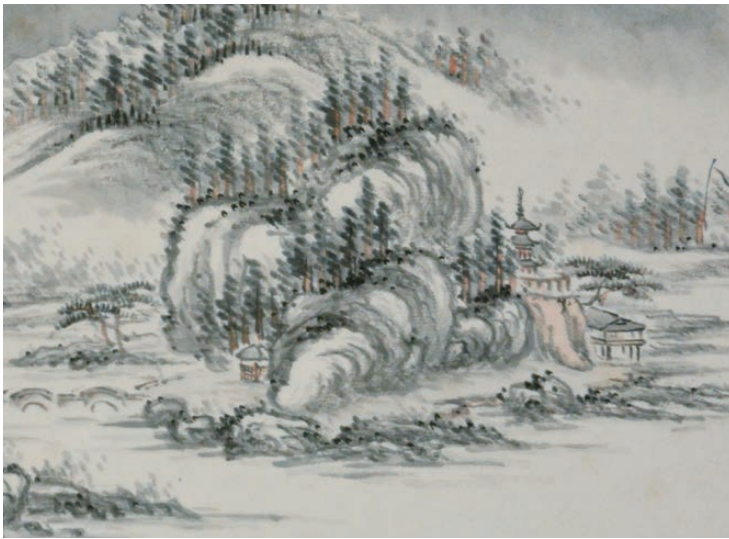
暴風により倒壊してしまいます。その間どのように維持されてきたかの記録は確認できませんが、波の立たない内海とは言え、海に面した木造の建物をこれだけの長い期間残すことは並大抵な事ではなかったでしょう。東照宮や天満神社の壮麗さは紀州藩が江戸時代を通して修理を繰り返したことにより保たれてきたことを踏まえると、和歌の浦の景観全体を紀州藩が威信をかけて護って来たと言えるのかもしれません。

一方、慶応3年の再建は和歌山城下の有志によりなされました。このことから、観海閣が庶民からも大切に扱われてきたことがわかります。二代目の観海閣も昭和36年(1961)の第二室戸台風により倒壊してしましますが、明治、大正、昭和と観光地として賑わった和歌の浦の名所として多くの人々を集め、数多くの絵葉書などの写真にその姿が記録されています。

二代目を再建した庶民の意志を継ぐように、三代目の観海閣は昭和38年(1963)に県による和歌公園の施設としてRC(鉄筋コンクリート)造で再建されました。木造ではなくりましたが、二代目の姿が丁寧に再現され、令和2年(2020)に老朽化で取り壊されるまで広く利用されたことから、現在でも多くの人々が、観海閣と言えばこの建物を思い起こすに違いありません。

2. 観海閣の復元的設計とオーセンティシティ

今回観海閣の建て替えが計画されるにあたり、考慮すべき条件がありました。それは平成22年（2010）に、観海閣が建つ妹背山も含めた和歌の浦が国の名勝に指定されたことによるものです。名勝地内での建て替え工事は、その周辺の歴史的景観を損なうことのない意匠とすることが条件となり、文化庁の現状変更許可を得る必要があります。観海閣は江戸時代から現代に至るまで、妹背山の景



初代観海閣 和歌の浦図 吉田南涯^{なんがい} 江戸後期

観を構成する重要な要素であり続けたため、建て直すこと自体に大きな障壁はありませんでしたが、根拠を持って正確に往時の建物の姿を再現することが求められました。真正性（オーセンティシティ）と表現される、世界基準の考え方に基づいた条件です。

和歌の浦は江戸時代に安芸の宮島と並び称された景勝地であり、画題として数多くの屏風等に描かれています。初代観海閣の姿もそこに見いだすことができますが、あくまでも絵画として簡略化されており、正確に再現するための



二代目観海閣 絵葉書 大正～昭和初期

根拠としては、不十分な状況でもありました。

一方で、昭和の時代まで残っていた二代目は、寸法が示された図面などを確認することはできなかったものの、古材や数多くの写真が残り、それらを解析することにより、真正性を確保して復元することが可能であると判断しました。

RC造となった三代目は、二代目の姿を参照したと考えられ、今回の復元的設計の寸法決定に関する重要な参考資料として、撤去前に実測を行うとともに図面の調査も実施しました。



三代目観海閣 RC造

3. 観海閣の復元的設計における史料

歴史的な建物を復元する際には、残された古材や柱の礎石から正確な位置や規模を、各部材の寸法などから建物全体の構成を推定します。

R C造観海閣建設時に礎石等江戸期の地上部基礎は撤去されており、正確にはそれ以前の位置や規模が分からない状況でした。また古材としては、二代目の石階段や石柱、和歌山城天守閣に保管されていた鬼瓦を確認することが出来ましたが、木製部材は和歌山市立博物館に保管された妻飾りの懸魚^{けぎよ}一点のみと、建物全体を復元する資料としては不十分な状況でした。

このため復元的設計にあたっては写真資料

を重用しましたが、絵葉書の多くは海越しの遠景で、印刷物でもあることから内部や細部の詳細までを確認することが出来ませんでした。

その中で、1950年代から和歌浦を撮影し続けている地元写真家から写真資料を提供していただき、実に多くの情報を得ることが出来ました。観海閣内部で子供達を撮影した写真からは、天井や床の様子が詳細にわかり、さらに鮮明かつ水平に撮影された写真であるため、各部材の寸法の比率を検討する資料となったことに加え、木目から柱や長押し^{なが押し}樅材^{けき}が用いられていたことまでを確認することができました。

また石階段が正対で写る写真からは、一段



地元写真家撮影の二代目観海閣の内部

目段石両端と柱芯が揃っていることがわかり、妹背山に残されていた段石古材から柱間寸法を確定し、伝統的な木割りの技法も応用して各部材の寸法を設定すると共に、多宝塔との軸線を揃える形で位置を特定しました。新築工事中に海底で発見された旧礎石の調査成果からも、設計した柱間寸法や位置の正確さが裏付けられました。

4. 観海閣の新築を支えた伝統技法と現代技術

今回の復元的設計においては、姿形だけでなく、伝統的な技法を用いることも目標としました。一方で公園施設として建築基準法に適合した構造的強度の確保、また地下遺構保護の必要から、海部旧石柱はR C造と現代的な技術を援用すると共に、木部は最新の構造解析技術を用いて部材の断面寸法、接合部の仕口を工夫することで、伝統的な材料や工法を遵守しながら必要強度を確保することが可能となりました。

外観を整えるため旧石柱部には特殊型枠を用い、花崗岩削り仕上げを模して仕上げました。



伝統的な技法で竣工した四代目観海閣



ステンレスを用いた海部配筋



木の特質を見極めた檜材の製材



露天での伝統工法による小屋組の組立



古材に倣って新調した鬼瓦と懸魚

二代目観海閣の主要部に用いられていた樹種と同じ檜材の他、床廻りや小屋組には檜材を和歌山県産材で調達しました。一般に流通している木材ではなく規格外の寸法で、確保は困難かと懸念されましたが、長年かけて主に海南市野上谷産の檜原木を収集していた製材所の協力を得ることが出来、部材ごとに材寸や木のクセ、木目までも吟味して木取りして製材することに、適材適所を揃えることが出来ました。木工事は重要文化財建造物の修理や社寺建築を手がける県内の大工が担当しました。設計図面に基づきながらも、原寸図の作成や荷重に

よる木材の変形等を想定して加工や組み立てを調整する等伝統的な技法が駆使されました。観海閣は風や海の影響を受ける名勝指定地での工事であり、現場を覆う素屋根を建設することが出来なかったため、多くの部材が複雑に組み合う軒廻りや小屋組は、一旦作業場で仮組を行って納まりを調整した上で、現地で一気に組み立てる、といった工夫で対応しました。瓦屋根も、古写真から瓦の割り付けや寸法を算出して復元しました。鬼瓦は古材に倣って新調し、伝統的な規則に基づいて配置した上で、風雨対策兼装飾である漆喰巻きを復しました。

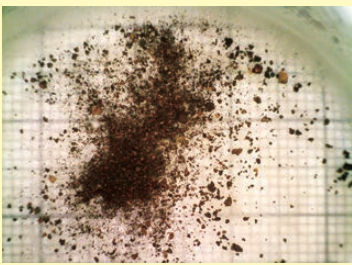
護岸石積は伝統的な打ち込み接ぎの技法で積み直し、石階段には古材を再用、不足分は風合いを揃えた花崗岩で新調して設置しました。三代目観海閣の解体工事に伴い一旦取り外していた建物周囲の青石を敷き直し、工事前仮設経路等を撤去して全ての工事が完了し、妹背山の歴史的景観を整えることが出来ました。今回の復元的新築工事は、単に景観を復しただけではなく、伝統的な木造建築を和歌山の地域に根付いた文化の継承にこそ意義があったと言えるかもしれません。(多井 忠嗣)



おこげから年代を探る！

土器に残った「おこげ」が、いつできたものなのか——あなたはわかりますか？

令和6年度に発掘調査を実施した大芝遺跡では、出土した土器の模様や形、作り方の特徴から、おおよそ縄文時代後期中葉のものと推定できます。しかし、縄文時代というのは日本列島で1万年以上続いた、とても長い時代です。通常、遺跡の時期を決める一番大きな手掛かりは出土した土器の形状や模様の変化なのですが、縄文時代が長く続く時代のため細かな年代を知ることが困難です。



土器に付着した炭化物(上)
と削り取った試料(下)

大芝遺跡で縄文時代の人々が生活していた時期を詳しく特定する方法はないでしょうか？ 科学的な方法で遺跡の時代を知る方法はいくつかあり、その一つに「放射性炭素年代測定法」があります。原理を簡単に説明すると、自然界には ^{14}C という炭素の一種である

放射性物質が存在しており、人間を含む動物は生きている間、呼吸や食事を通して摂取しつづけて常に体内で一定量を保っています。しかし、動物が死ぬと ^{14}C の供給が止まります。さらに一定の期間を経ると ^{14}C は減少していくという性質があります。そのため、動物植物に由来する試料に残っている ^{14}C の量を調べることで、その ^{14}C の持ち主がいつ死んだのか明らかになるのです。

出土した土器をよく観察していくと、中には焦げつきのような黒い塊が付着しているものがありました。これは食べ物を土器で煮た際に吹きこぼれなどできたと思われるおこげ(炭化物)です。今回は、この縄文土器に付着していたおこげと炭化した堅果類(けんかるとい)の

計3点の分析を外部の専門機関に委託しました。分析は加速器質量分析法(AMS法)と呼ばれる、試料の中の ^{14}C の量を直接調べる方法で行いました。この方法は、短時間かつ少量の試料で測定が可能であるため、考古学の分野のみならず地質学や堆積学、温室効果ガスの年代測定といった環境問題など様々な分野で活用されています。

分析の結果、おこげは3,500〜3,700年前のものであることが判明しました。大芝遺跡から出土する土器はこれまでの編年研究の成果から縄文時代後期中葉ごろのものと考えられているので、2つの成果を合わせて大芝遺跡が営まれていた時代についてより詳細な情報を得ることができました。時には科学の力も借りることで、考古学は過去を明らかにしていきます。今回は、この小さなおこげが、縄文時代の時間を私たちに教えてくれました。

(濱崎 範子)



観海閣から片男波の砂洲や熊野へと続く山並みを望む

「麓に入江らしく穏やかに光る水がまた海浜とは思われない沢辺の景色を、複雑な色に描き出していた。自分は傍にいる人から淨瑠璃にある下り松というのを教えて貰った。その松はなるほど懸崖を伝うように逆にして枝を伸していた。」

夏目漱石は、小説『行人』において和歌浦の干潟と妹背山の様子を描写しています。残念ながら観海閣には触れていませんが、大正時代の絵葉書では下り松の背後に観海閣が写る構図が定番となっていること、漱石の日記に妹背山に今も残るあしべ屋の別荘の記述があることから、漱石が第二室戸台風で倒壊してしまう以前の観海閣を訪れていたと見て間違いはなさそうです。

『行人』では奠供山のエレベーターや、紀三井寺の境内から和歌浦の光景をパノラマのように見下ろす様子が描写されますが、間仕切りも無くただ水平に開かれた観海閣では何を感じたのでしょうか。漱石は小泉八雲の後任として東京大学の英文学講師の職につきました。「僕のも大分神秘的で、故小泉八雲先生に話したら非常に受けるのだが」と『吾輩は猫である』にも八雲が登場します。その八雲が濱口梧陵の逸話について書いた文章に、興味深い洞察があります。

「あの、中に何も無い、がらんどうな社の前で（中略）ただそこに、目にも見えず、耳にも聞こえず、また手にも触れない、それでいて、力として一偉大な力として実在していることを知覚する。」日本の伝統的な信仰についての記述ですが、具体的な機能を持ち合わず、虚空間しか表現しようが無い抽象的な場に古来閑かに佇む気配。再び木造で新築された観海閣にも宿りますように。

(多井 忠嗣)

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

那智山青岸渡寺本堂の北西約50mの場所で、令和4年度、那智山青岸渡寺行者堂建設に伴い、那智山坊跡確認調査及び工事立会調査が和歌山県教育委員会・那智勝浦町教育委員会により実施されました。その調査により、中世から近世の遺構・遺物が確認されました。そこで今回は、近世の出土遺物の特徴について紹介します。

出土遺物は、土師質土器の炮烙や陶磁器の播鉢・碗など、日用雑器がほとんどでした。これらの遺物の産地は、堺・明石や丹波など西日本のほか、瀬戸・美濃、肥前産の土器が出土することから、東海地域や九州地域とも交易が盛んであったことが想像できます。

日用雑器以外の遺物としては、陶器製の鳥の餌入れ・水入れが出土しました。国立国会図書館「本の万華鏡」によると、鳥を飼うことは、大名や武士の間で広まったのち、江戸時代中期頃には庶民の間でも流行するようになります。鳥の飼い方について述べた「飼育書」も多数発行されるようになります^①、当時の人々が鳥を飼うことに対する関心が高かったことがうかがえます。

このような出土遺物は、調査地における当時の人々の暮らしぶりや流行を知ることができる、貴重な資料と考えられます。

(石丸 彩)

【出典】(1)国立国会図書館「本の万華鏡」第37回鳥と暮らしのヒストリー 第三章飼う／飼い方よりどりみどり

【参考文献】石丸彩2026「那智山坊跡出土遺物(2)・近世編―行者堂建設に伴う確認・立会調査より―」『和歌山県文化財センター研究紀要』第4号



那智山坊跡出土 鳥の餌入れ・水入れ

催し物案内

和歌山県内の文化財関係イベント情報（2026年夏～2026年秋）

和歌山県立博物館

- 改修工事のため休館 ～2026年8月10日(月)
- 特別展「蘆雪生動 一南紀 無量寺への旅一」 2026年8月11日(火・祝)～9月23日(水・祝)

和歌山県立近代美術館

- 回顧展「下村観山展」 2026年5月30日(土)～7月20日(月・祝)

和歌山市立博物館

- 企画展「うつりかわる和歌の浦」 2026年4月25日(土)～6月21日(日)
- 企画展「秀吉・秀長と和歌山」 2026年8月8日(土)～10月4日(日)
- コーナー展示「大谷古墳と紀の川北岸の古墳」 2026年6月2日(火)～8月2日(日)
(常設展示室内のテーマ展示です)
- コーナー展示「滑稽秋の空」と勝本義隣 2026年8月4日(火)～10月4日(日)
- 特集展示「作家・有吉佐和子 紀の川・華岡青洲の妻」 2026年4月～7月

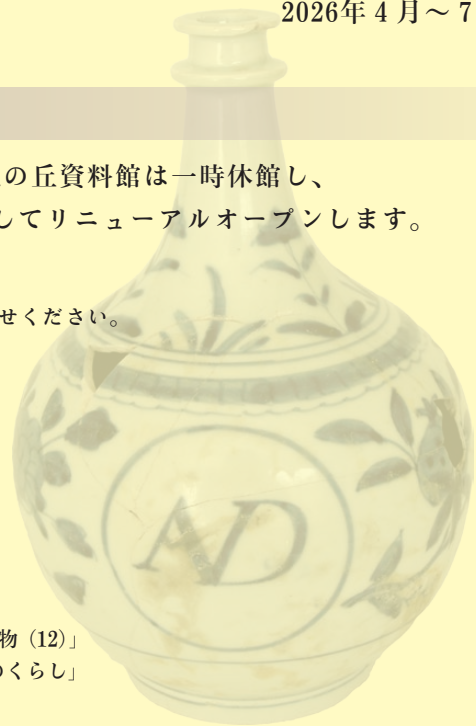
和歌山県立紀伊風土記の丘

- 令和7年度末(2026年3月31日)をもって、紀伊風土記の丘資料館は一時休館し、令和10年(2028)和歌山県立考古民俗博物館(仮称)としてリニューアルオープンします。

※掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙 東から見通した観海閣と海禅院多宝塔
- 2 特集「名勝和歌の浦 和歌公園観海閣の復元的新築工事」
- 6 短信「おこげから年代を探る！」
- 7 きのくに歴史小話「文化財建造物課 和歌山の建物とゆかりの人物(12)」
「埋蔵文化財課 那智山周辺における江戸時代のくらし」
- 8 催し物案内



風車113 (2026・夏号)

令和8年6月30日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp/>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】〒640-8301 和歌山市岩橋1263番地の1
TEL 073-472-3710 FAX 073-474-2270
E-mail kanri-2@wabunse.or.jp



ホームページ



YouTube



WABUNSE_OFFICIAL
Instagram